

# 図書館だより

'86. 7

## Marguerite Durasの本

- 『愛人』 清水徹訳 河出書房新社 (953-D98)
- 『アンデスマ氏の午後 辻公園』 三輪秀彦訳  
白水社 (953-D98)
- 『ヒロシマ、私の恋人 かくも長き不在』 清岡卓  
行、阪上修訳 筑摩書房 (952-D98)
- 『インドア・ソング 女の館』 田中倫郎訳  
白水社 (952-D98)
- 『語る女たち』 田中倫郎訳 河出書房新社  
(954-D98)
- 『モデラート・カンタービレ』 田中倫郎訳  
河出書房新社 (953-D98 河出文庫)
- 『夏の夜の十時半』 田中倫郎訳 河出書房新社  
(953-D98)
- 『死の病い・アガタ』 小林康夫、吉田加南子訳 朝日出版社 (953-D98)
- 『ユダヤ人の家』 田中倫郎訳 河出書房新社 (953-D98)
- 『木立ちの中の日々』 新しい世界の短編1 平岡篤頼訳 白水社 (908.3-A94h-1)
- 『愛』 今日の海外小説 田中倫郎訳・解説 河出書房新社 (908-Ko75-D98)
- 『ヴィオルの犯罪』 今日の海外小説 田中倫郎訳・解説 河出書房新社 (908-Ko75-D98)
- 『破壊しに、と彼女は言う』 今日の海外小説 田中倫郎訳・解説 河出書房新社  
(908-Ko75-D98)
- 『タルキニアの小馬』 20世紀の文学4 田中倫郎訳 現代出版社 (908-N73g-4)



## 「図書館だより」既刊号（1—22号）内容案内 2

今回は連載ものの中からいくつかご紹介いたします。排列は執筆者のABC順、専攻・所属等は掲載時のものです。バックナンバーのうち、配布用の在庫があるものについては、閲覧室内の所定の場所に置いてあります。どうぞお持ちください。

## 巻頭言

- 相原宗和（音楽学） 聖チェチーリア音楽院図書館で No.14 1981.12  
 福士敏雄（食品衛生・加工貯蔵） 読書とテレビジョン No.15 1982.6  
 本堂正夫（英文学） 図書館の思い出 No.11 1980.6  
 板垣憲（英文学） 「物」としての「書物」 No.6 1978.2  
 伊藤敬（国文学） 国文学研究資料館への道 No.16 1982.12  
 伊藤信夫（栄養学） ブラウジング・ルームのこと No.5 1977.9  
 家郷隆文（国文学） 『為家集』の写本 No.9 1979.5  
 川勝正治（生物学） 故人との約束 No.19 1984.6  
 黒沢和夫（衛生学） 出会い No.13 1981.4  
 三浦良一（育児学） 汽車の中で No.10 1979.12  
 中山周三（国文学） 韓国の博物館見学記 No.18 1983.12  
 小野百合（音楽） 美しいものへの感動を大切に No.22 1985.12

- 佐々木隆介（社会学） 学生と読書 No.3 1976.6  
 佐藤宜男（国語学） 未刊資料をもとめて No.7 1978.7  
 宇野春夫（歴史学） 図書館見学 No.12 1980.12  
 山田昭夫（国文学） 雑誌雑談 No.4 1977.2  
 山北タツエ（英文学） 印象に残ったこと No.8 1979.1  
 山崎治子（被服学） 3つの課題 No.20 1984.11  
 矢野篤輔（自然科学） 未知なるものへの憧憬 No.21 1985.6

## 書齋訪問

- 青木正次（日本文学・近世） No.1 1975.6  
 フリゼケ・アンゲラ（英文学） No.3 1976.6  
 後藤平吉（法学） No.9 1979.5  
 稲垣是成（保健学） No.7 1978.7  
 井上修梧（体育） No.4 1977.2  
 伊藤弘子（家政学） No.4 1977.2  
 伊藤義生（米文学） No.5 1977.9  
 川勝正治（生物学） No.8 1979.1

## 目次

「図書館だより」既刊号内容案内2	2	自己紹介による図書館職員ラインアップ2	7
巻頭言・書齋訪問ほか		鈴木高明・森谷和子	
絶句集抄	3	藤に咲く花2	8
雑誌のおはなし—出版社のPR誌	4	お知らせ	8
連載 北海道の文学2	6		
転ばぬ先の杖—入門・研究のために			

近野亘(宗教学・中世哲学) No. 2 1976. 2  
 黒川昭和(教育学) No. 5 1977. 9  
 松本暎子(書道) No. 7 1978. 7  
 中山周三(日本文学) No. 8 1979. 1  
 大畑耕一(音楽) No. 3 1976. 6  
 高橋雅晴(英語学) No. 10 1979. 12  
 丹貞一(栄養学・食品衛生学) No. 2 1976. 2  
 山本良三(食品化学) No. 9 1979. 5  
 山崎治子(被服整理・被服衛生) No. 10 1979.  
 12  
 矢野篤輔(自然科学) No. 1 1975. 6

### 本あれこれ・本と私と

阿部典子(調理学) 読書へのさそい No. 11  
 1980. 6  
 天野ちよ(調理学) 料理の本と絵の本 No. 13  
 1981. 4  
 橋本征子(フランス語) パリの本屋さんたち  
 No. 15 1982. 6  
 日高昭二(国文学) 本についてなつかしく想  
 い出す事 No. 11 1980. 6  
 本田錦一郎(英文学) 本を旅する No. 16  
 1982. 12  
 飯村しのぶ(家政学) "モルガン" と "マリ  
 ノウスキー" と私 No. 14 1981. 12  
 池野洋子(教務課) 遊牧民の国を訪ねて  
 No. 13 1981. 4  
 石井智美(食堂) 旅の道づれ No. 18 1983.  
 12

### 絶句集抄

ちょっと昔の話である。これこれシカジカのことをとというお尋ねに、それならばこの本をと差し出した。すると、あろうことかその学生さん、いきなり、赤のボールペンで目あてのところに線を引いた。図書館の本に、私の目の前である。啞然、呆然、ただ絶句。気を取り直しひと言ご注意申しあげたが、彼女、何が悪いのか分からないのだろう、キョトンとしていた。

これも昔の話。たまたまカウンターに居た男

磯貝道子(食堂) 地下食堂からの伝言 No. 14  
 1981. 12  
 川端ひろ子(体育) 私の読書時間と空間  
 No. 12 1980. 12  
 木村フク(交換室) 幼い頃の思い出 No. 17  
 1983. 6  
 北岡富弥(営繕) 図書館と我が家の家宝  
 No. 12 1980. 12  
 黒川昭和(教育学) 本との出会い No. 17  
 1983. 6  
 曾根田敦子(学生課) 植物と神話 No. 16  
 1982. 12  
 鈴木智子(国語学) 本との出会い No. 15  
 1982. 6

### 留学記・海外記

青木正次(国文学) ちょっと見のブラジル  
 No. 19 1984. 11  
 近野亘(宗教学) パチカン市国 No. 22 1985.  
 11  
 永田淑子(英文学) アメリカの大学で No. 15  
 1982. 6  
 中野美代子(中国文学) 中国の塔めぐり  
 No. 21 1985. 6  
 関憲治(英文学) Cambridgeにて No. 20  
 1984. 11  
 藪禎子(国文学) リモージュへの旅 藤村の  
 跡を訪ねて No. 14 1981. 12

性職員に近づいた学生さん、いかにも困ったような顔付きで、おずおずと申し出た。

「あ、先日前みごとをした職員の方、探しているんですけど」

「はい、誰のことでしょうか」

「名前はわからないんです」

「どんな人？」

— やや間あって— 「美しい人」

絶句、絶句、ただただ絶句。

## 雑誌のおはなし —— 出版社のPR誌 ——

PR誌といっても、単なる広告雑誌ではありません。あなたの好きな赤川次郎の小説もあれば、為になるお話も満載。ちょっと知的な読書人の間では、気になる雑誌でございます。



### 〈やっぱりPR誌が面白い〉

出版社のPR誌といえば、書店に行くとレジの脇に積み上げてあるので、知っている方も多いと思います。私も学生の頃、表紙のイラストの美しさにひかれて手をのびしたことがあります。無料配布かと思ったのに、裏をかえすと定価〇〇円とあって、今思えばタダ同然の値段でしたがなにせまるほどの学生だったので、そのままとの所に戻して来たのを覚えています。

PR誌については、図書館だよりの第4号(昭和52年発行)に、山田昭夫先生のお話載っています。ちょうど「本」「本の窓」「三省堂ぶっくれっと」などのPR誌が次々と創刊された頃です。当時の年間購読料は、送料込みで200円。だいたいコーヒー1杯分に相当したということです。安くて、しかもバラエティーに富んだ知的情報を得ることができるお得な雑誌であることは、当時も今も変わりありません。

現在発行されているPR誌では「学燈」が最も古く、1897年の創刊です。それから90年をへた現在、各出版社からかなりの数のPR誌が発行されています。あくまでも読者と出版社を結びつけることが目的で、売り上げを気にしないせいもあってか、内容には自由な雰囲気を感じられます。作る側も読む側もリラックスして楽しめるのが、PR誌の人気の秘訣のように思います。ちなみにこのPR誌、外国ではあまり例を見ないということです。

### 〈広告ばかりじゃないんだゾ!と〉

PR誌には、各出版社の近刊情報のほかには、小説、エッセイ、対談などが掲載されています。講談社現代新書に、田辺聖子の『大阪弁おもしろ草子』(818-Ta83)という本があります。4

月に新着書として展示したばかりですので、見覚えがあるかも知れません。大阪弁独得の言い回しと、その背景をなす庶民の暮らしや上方の風俗をこまやかに観察して綴った楽しいエッセイ集です。実はこれはもともと、講談社のPR誌「本」に連載されていた「ことばの天窗」が改題され、書籍化したものです。PR誌に掲載されたエッセイや小説が、のちに単行本として刊行された例は他にもあります。井上ひさし著『自家製文章読本』(816-I57)、倉橋由美子著『大人のための残酷童話』(913.6-Ku51)は、いずれも「波」に連載されていました。「ちくま」には、昭和55年から5年間にわたって「ぼっぺん先生の博物誌」が連載されていました。絵本作家のぼっぺん先生こと舟崎克彦が、四季折々の話題を歳時記風にユーモアをまじえて語ったこのエッセイも、同じ題の単行本になりました。岩波書店の「図書」に今年の3月まで連載されていた井上光晴の小説も、近々刊行の予定だそうです。

現在連載中のものでは「本の窓」に掲載されている瀬戸内寂聴の「女人源氏物語」が好評です。これは源氏物語に登場する女性達が主人公で、光源氏との関わりの中で彼女たちが何を感じ、何を思っていたのかが語られています。面白いのは「波」の「日本語ハッ当たり」。随筆家江國滋が「イッキ!イッキ!」「実年」などの新造語やギャルことばをつかまえて当り散らす様が痛快です。「青春と読書」には、「クララ白書」「なんて素敵にジャパネスク」などの作品で今や青春小説の第一人者とも言われる本学の卒業生、水室冴子のエッセイが連載されています。また同誌には、椎名誠とかんべむさしの

小説が連載中です。PR誌にはこの他に、インタビューや読み切りのコラムにも面白いものがたくさんあります。今あげたように、執筆者は著名な作家や随筆家が多く、また時には俳優や劇作家やプロ野球の選手が登場し、彼らの読書家としての意外な一面を見せてくれることもあります。

研究資料として参考になるPR誌もあります。英米文学関係では「不死鳥」が、国文学関係では「レポート笠間」「汲古」「武蔵野文学」が権威ある研究者の論文を紹介しています。他に「UP」「書斎の窓」等も、大学教授や専門家が執筆したものが多く、学術的にも注目されています。

#### 〈本について知りたい時に〉

岩波書店では、昨年5月に刊行した文庫本5点に読者カードを挿入し、アンケート調査を行いました。すると解答者中、50代以上の人では半数以上が「図書」を見てその本を購入したという事がわかったそうです。書物が氾濫している今日、PR誌は最も読みたい事柄が書かれている本を探すための情報源でもあります。特に「学鑑」の書評には、洋書が多く取りあげられています。また洋雑誌の紹介もあります。辞書について知りたい時は「三省堂ぶっくれっと」

が役に立ちます。辞書の歴史、その編集に携った人たちの苦勞話も出ています。(このPR誌、同社が初めて辞書に用いたインディアペーパーを使っている点にも注目して下さい。)

というわけで、「山椒は小粒でピリリと辛い」と言いますが、PR誌も小柄ながらその充実した内容から一般誌を凌ぐと言っても過言ではないでしょう。今後は、何かPR誌ならではの目新しい企画を盛り込んで、増々読者に親しまれる雑誌になることを期待しています。

#### 〈図書館からのPR♡〉

最後に自分に関して申しますと、図書館で働いていると、高いお金を払って本を買わなくて、借りて読めばいいのです。書店さんには申しわけありませんが、図書館にある本は、何度もくり返して読みたい程、愛着のある本しか買うことはありません。ところがこうしてPR誌を山づみにして眺めていると、やっぱり欲しい本があれこれと出てくるのです。ひとつ大事なことを忘れていました。読者の購買欲をそそのめるのもPR誌の重要なお役目なのです。皆様、PR誌の甘い誘いにはくれぐれもご用心。読みたい本があるときは、図書館をご利用ください。

#### 継続受入PR誌一覧

(誌名)	発行所	創刊年	刊期
「ちくま」	筑摩書房	1969	月刊
「同朋」	同朋舎出版	1978	月刊
「不死鳥」	南雲堂	1953	年刊
「学術通信」	岩崎学術出版社	1977	季刊
「学鑑」	丸善	1897	月刊
「本」	講談社	1976	月刊
「本のひろば」	キリスト教文書センター	1957	月刊
「本の窓」	小学館	1978	月刊
「科学サロン」	東海大学出版会	1977	季刊
「花曜」	花曜社	1984	季刊
「汲古」	汲古書院	1982	年2回
「未来」	未来社	1968	月刊
「みすず」	みすず書房	1959	月刊
「武蔵野文学」	武蔵野書院	1955	月刊
「波」	新潮社	1967	月刊
「レポート笠間」	笠間書院	1971	年刊
「三省堂ぶっくれっと」	三省堂	1975	隔月
「青春と読書」	集英社	1966	月刊
「書斎の窓」	有斐閣	1953	月刊
「春秋」	春秋社	1959	月刊
「創文」	創文社	1962	月刊
「図書」	岩波書店	1938	月刊
「UP」	東京大学出版会	1972	月刊

—「雑誌・新聞総カタログ」参照—  
 ※最新号は新着雑誌コーナーに、バックナンバーは書庫の3層にあります。

## 連載 北海道の文学 2

## 転ばぬ先の杖 —— 入門・研究のために

前回『北海道文学大事典』をとりあげたついでに、今回は前説の?として、北海道文学の入門と研究のための文献をご紹介します。と言っても、スペースの関係上、とても全部は載せられない。幸い『北海道文学大事典』の事項編に要領のよい記述がある。解説としてはぜひそちらをお読みいただくことにして、ここには当館所蔵の主要なものを並べるだけでご勘弁いただく。もとより当館に関連資料の全てが揃っているわけではないが、それにしても沢山あるものである。“北方人の血と運命” “悲劇的精神系譜” といった術語の魅力魔力のなせる業なのだろうか。

掲載書は通史通説的なものに限り、作家作品等の個別研究は除いた。掲載にあたっては大まかな分類をし、刊行年の順に並べた。個々の記述は書名、著编者、出版社、刊行年の順である。なお請求記号は省略した。

## 1. 文学史

- 北海道文学史稿 改訂版 佐藤喜一 楡書房 昭31  
物語・北海道文学盛衰史 北海道新聞社学芸部編 河出書房 昭42  
北海道文学史 全3 木原直彦 北海道新聞社  
明治編 昭50  
大正・昭和戦前編 昭51  
戦後編 昭57  
釧路文学運動史 全3 鳥居省三ほか 釧路市  
明治・大正編(釧路叢書6) 昭39  
昭和編(——— 10) 昭44  
戦後編(——— 19) 昭53  
空知の文学 上 林義実 みやま書房 昭54  
留萌沿岸文学誌 高橋明雄 朗北詩話会 昭51

## 2. 文学論

- 風土のなかの文学 和田謹吾 北書房 昭40  
〈日本〉へ架ける橋 小笠原克 辺境社 昭47  
近代北海道の文学 小笠原克 日本放送出版協会 昭48  
北海道文学の周辺 木村真佐幸 北海道新聞社 昭52

- 北海道 風土と文学運動 小笠原克 北海道新聞社 昭53  
現代文学と北海道の作家群像 高野斗志美 北海道新聞社 昭53  
柚木衆三評論集 柚木衆三 其刊行会 昭55  
北海道文学全集 別巻 北海道の風土と文学 立風書房 昭56  
評論集異端の系譜 鳥居省三 北海道新聞社 昭58  
北海道の文学 公開講座北海道文化論 札幌商科大学人文学部編 札幌商科大学 昭59  
北海道文学の系譜 北海道大学放送教育委員会編 北海道大学 昭59

## 3. 事典・地図

- 北海道文学大事典 北海道文学館編 北海道新聞社 昭60  
北海道文学地図 北海道文学館編 北海道新聞社 昭54

## 4. 文学散歩

- 北海道文学散歩 朝日新聞北海道支社編 淡交社 昭38

続北海道文学散歩 同編 北苑社 昭43  
文学の旅 1 北海道 千種会 昭47  
北海道文学散歩 既4 木原直彦 立風書房

I 道南編 昭57

II 道央編 昭57

III 道東編 昭58

IV 道北編 昭58

★現在雑誌「北方文芸」に樺太編連載中

### 5. 短歌

北海道歌壇史 相良義重編 北海道歌人会 昭46

北海道短歌事典 北海道歌人会編 北海道新聞社 昭55

### 6. 俳句

北海道俳壇史 比良暮雪 青暎社 昭22

北海道俳句史 木村敏男 北海道新聞社 昭53

北海道民衆俳句の旅 森山軍治郎 日本放送出版協会 昭53

### 7. 川柳

北海道川柳史 斎藤大雄 北海道新聞社 昭54

## 自己紹介による

## 図書館職員ラインアップ 2

### 鈴木 高明 総務部

敗戦後の図書館は、よく占領軍に臨検されました。情報将校が武装兵と乱入し、軍国主義の本を没収するのです。見当違いの本も沢山取られました。物資も無く生産は止り、毎日停電の時代で、列車の液電池を借り、暗い豆球を頼りに貸出を扱い、駅構内の客貨車区へ荷車で充電に往復しました。紙不足で本も乏しく、前夜から富貴堂に並んだり、バケツに詰めたバターと現金を持ち、東京へ本の買い出しに出たりしたものです。パチンコもテレビも未だで、本が読まれ、利用者の長い列は図書館員に疲れを忘れさせました。僕は専門図書館や資料室、列車仕立の移動図書館、カトリック国際機関等で、図書について学び働き、先頃本学に奉職しました。自分を描けと言われ、逆らう勇氣もなし書くもならず、おろおろと昔がたりで責めを逃れるつもりです。今は資料保守作業と選書を担当して、日光にも学生にも遠い一隅でひそやかに本に埋もれています。ひるがえって身辺は、東京船載の新妻と、心熱い明け暮れなのです。

### 森谷 和子 総務部

図書の受入を担当しています。読書の楽しみのなかにその本の装幀をながめるということがあると思います。私の仕事は、美しい本のタイトルページに残酷にも受入印を押していることです。図書館に入った本を誰よりも速く手にすることができるという役得はありますが、いつもいつも一冊一冊著者の心がこもった本をひらく度に、自責の念にかられつつ赤や青のスタンプで印を押しています。でもこの仕事をしないと本は図書館の蔵書とならないのですからしかたがありません。いつも一階の事務室の窓側の席で明るい外ばかり眺めて仕事をしています。なぜかという学生時代から山歩きが好きで、部屋に閉じこもっているより、お花が咲き乱れる尾根を散歩したり、しんとした雪の林の中を兎の足跡を追いながら、ぼんやり歩いているのが大好きだからです。でも残念ながら最近、山に出掛ける機会が少なくなり、かわりに山の版画をつくったりして気持の上だけで山の中をさ迷っています。

## ~~~~~ 藤に咲く花 2 ~~~~~

## 娑羅の花 (なつつばき)

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。  
娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりを  
あらわす。 平家物語



夏に椿によく似た白色の5弁の花を開くことから夏椿といい、この呼称が正しい植物名である。娑羅双樹は、伝説によればシャカがクシナラで入滅したとき、その寝床の四辺にあったシャラの木で、それがひとつの根から幹が2本ずつ出たので双樹と呼ばれた。日本の寺院などでシャラの木といって植えているのは、インドのシャラとは関係のない、日本産の夏椿である。

## 参 照

カラー図説日本大歳時記(911.307-Ko78)  
文学植物記(470.4-Y66)

写真撮影 公仕室 浦田 洋

☆ 昭和60年度の卒業生の方から、下記の図書が寄贈されました。

## 記

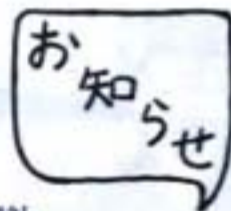
<短大国文科の皆さんより>

井伏鱒二自選全集 全12巻 新潮社

<文学部国文学科の皆さんより>

版本文庫の中から数点 国書刊行会

☆ 中学・高等学校使用の教科書、及び指導書  
各科目入りました。ご利用ください。



☆ 夏季休暇中の予定は以下の通りです。  
詳しくは掲示板にてお知らせ致します。

<開館> 7月16日～7月19日

7月30日～8月2日

8月18日～8月30日

開館時間 9時30分～16時

(但し土曜日は15時30分迄)

<休館> 7月20日～7月29日

8月3日～8月17日

☆ 図書館だより25号は、10月発行の予定です。

## カウンターこぼれ話

5月2日 雨のち晴れ  
短大☆科のE子さんが出した購入希望図書申し込み用紙を見ると……  
出版社 筑馬書房!!  
畜馬だったらわからなかったと思います。

5月?日 雨  
こちらは予約申し込み用紙。  
書名 ナハノロイラソ……?  
実は「ソライロノハナ」という本。表紙に書名が右から左に書いてあったのでした。

<表紙の人>マルグリット・デュラス  
フランス人 作家 1914年～  
ヴェトナムで過ごした少女時代を描き、1984年に発表した『愛人』が同年ゴンクール賞を受賞。さらに今年4月にはリップ・バリ・ヘミングウェイ賞を受賞し、近頃最も注目されている作家の1人。写真は18歳の頃。

藤女子大学  
藤女子短期大学

図書館だより 第24号 1986. 7. 1 発行

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館